Waon
RECORDS
DSD Recording

Varietie of Lute Collections

Toru Sakurada - Favourite Lute Music
Anthology on seven all-gut-strings lutes

WAONCD-060 Digital Book

櫻田 亨　やすらぎのガット 7つの響き

Varietie of Lute Collections

リュート愛奏曲集「7つの総ガット弦リュートによる名曲集」

❖ 6 コース・ルネッサンスリュート

フランチェスコ・ダ・ミラノ作曲

1. ファンタジア 33番
2. ファンタジア 40番

ハンス・ノイジドラー作曲

3. お気に召すまま
4. ラテン舞曲
   「ヴァシャ・メーザ（パッサメッツォ）とフップフ・アウフ」

❖ 8 コース・ルネッサンスリュート

作者不詳 & フランシス・カティング作曲

5. グリーンスリーヴズ

ジョン・ダウランド作曲

6. メランコリー・ガリアード
7. ラクリメ（涙のパバーヌ）

❖ 10 コース・ルネッサンスリュート

ニコラス・ヴァレット作曲

8. 菩提樹の下で
9. デカパン道化師

❖ 13 コース・アーチリュート

ピエトロ・パオロ・メリイ作曲

10. カプリッチョ「偉大なマティアス」
11. コレンテ「王妃」

❖ 11 コース・バロックリュート

エネモン・ゴーティエ（老ゴーティエ）作曲

12. メッサンジョーに捧げるトンボー
13. カナリー
14. メサンジョーの遺言

❖ 14 コース・テオルボ

ロベール・ド・ヴィゼー作曲

15. リュリ氏の序曲「ヴェルサイユの洞窟」
16. パッサカイエ（パッサカリア）

❖ 14 コース・バロックリュート

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ作曲

17. プレリュード（前奏曲）・ハ短調

シルヴィウス・レオポルド・ヴァイス作曲

18. ファンタジー・ハ短調
19. チャコーナ（シャコンヌ）・ト短調

Varietie of Lute Collections

Toru Sakurada - Favourite Lute Music Anthology on seven all-gut-strings lutes

❖ 6-course Renaissance Lute

Francesco da Milano (1497–1543)

1. Fantasia (Ness33)
2. Fantasia (Ness40)

Hans Newsidler (1508–1563)

3. Nach willen dein
4. Ein welscher tantz
   Wascha mesa～Der hupff auff

❖ 8-course Renaissance Lute

Anon. / Francis Cutting (c.1600)

5. Gleensleeves

John Dowland (1562–1626)

6. Melancholy Galliard
7. Lachrimae

❖ 10-course Renaissance Lute

Nicolas Vallet (±1585–±1650)

8. Onder de Lindegroene
9. Les Pantalons

❖ 13-course Archlute

Pietro paolo Melij (17th century)

10. Capriccio ditto il gran Matias
11. Corrente detta la Regina

❖ 11-course Broque Lute

Ennemond Gaultier (1575–1651)

12. Tombeau de Mezangeau
13. Canarie
14. Testament de Mezangeau

❖ 14-course Theorbo

Robert de Visée (c.1650–c.1725)

15. Ouverture, La grotte de Versailles de Mr.Lully
16. Passaquaille

❖ 14-course Broque Lute

Johann Sebastian Bach (1685–1750)

17. Preludium (BWV999)

Sylvius Leopold Weiss (1686–1750)

18. Fantasie
19. Ciacona

Gut strings :
Gamut Musical Strings, U.S.A.
AQUILA CORDE ARMONICHE, ITALIA

使用楽器

1. 6コース・ルネッサンスリュート:
   マルティン・デ・ヴィッテ 2001年（オランダ）
2. 8コース・ルネッサンスリュート:
   リチャード・バーグ 1990年（カナダ）
3. 10コース・ルネッサンスリュート:
   セバスティアン・ヌニェス 1996年（オランダ）
4. 13コース・アーチリュート:
   リチャード・バーグ 2003年（カナダ）
5. 11コース・バロックリュート:
   マルティン・デ・ヴィッテ 2004年（オランダ）
6. 14コース・テオルボ:
   マルティン・デ・ヴィッテ 2003年（オランダ）
7. 14コース・バロックリュート:
   リチャード・バーグ 1990年（カナダ）

Instruments:

1. 6-course renaissance lute by Martin de Witte,
   2001 (Den Haag, The Netherlands) A=440Hz
2. 8-course renaissance lute by Richard Berg,
   1990 (Ottawa, Canada) A=440Hz
3. 10-course renaissance lute by Sebastian Nuñez,
   1996 (Utrecht, The Netherlands) A=415Hz
4. 13-course archlute by Richard Berg,
   2003 (Ottawa, Canada) A=440Hz
5. 11-course baroque lute: by Martin de Witte,
   2004 (Den Haag, The Netherlands) A=415Hz
6. 14-course theorbo by Martin de Witte,
   2003 (Den Haag, The Netherlands) A=392Hz
7. 14-course baroque lute by Richard Berg,
   1990 (Ottawa, Canada) A=415Hz

プログラムノート

1600年前後に活躍したイギリス生まれで当時最大のリュート奏者ジョン・ダウランド（John Dowland 1562-1626）の作品に「ラクリメ・または7つの涙」（"Lachrimae or seaven Teares figured in seaven passionate Pavans,,," London 1604）と言うのがある。これはリュート・ソロとして作られたかの名曲「ラクリメ（涙のパヴァーヌ）」（Lachrimae）のヴァイオル（ヴィオラ・ダ・ガンバ）コンソートとリュートのための「いにしえ古の涙」（Lachrimae Antiquae）、「よみがえった蘇ったいにしえ古の涙」（Lachrimae Antiquae Novae）、「ため息の涙」（Lachrimae Gementes）、「悲しみの涙」（Lachrimae Tristes）、「偽りの涙」（Lachrimae Coactae）、「愛の涙」（Lachrimae Amantis）、「真実の涙」（Lachrimae Verae）と題された7つの響きである。ダウランドは高名であったにもかかわらず女王エリザベスI世付きのリュート奏者に選ばれず、その音楽人生の大半を大陸（主としてデンマーク）で過ごした。「ラクリメ（涙のパヴァーヌ）」のリュート歌曲である「流れよ、わが涙、そなた汝の泉から溢れ出て、」（"Flow my teares fall from your springs,"）のいとも悲しく感動的な歌詞は彼の人生を物語るかのようである。

ジョン・ダウランドの息子ロバート・ダウランド（Robert Dowland）は1610年にロンドンで「様々なリュートのお手本」（"Varietie of Lute Lessons"）という曲集を出版した。この曲集には父ジョン・ダウランドを始め当時のヨーロッパのいろいろな国のリュート奏者による曲が集められている。このCDには7つの異なるタイプのリュートが使われている。つまり「7つの響き」が聴かれる。合計130本にもなるガット弦からでる音色は、暖かい安らぎを与えてくれる。そのうえ1500年頃から1750年頃までの約250年にまたがるリュート音楽が1枚のCDで聴ける。まさに"Varietie of Lute Collections"である。

中世ヨーロッパのリュートは1500年頃（ルネッサンス時代）になると6コース（11弦）に定着する。その6コース・リュートで、「聖霊」（Il divino）とまで呼ばれたイタリアのフランチェスコ・ダ・ミラノ（Francesco da Milano 1497-1543）と、ドイツのハンス・ノイジードラー（Hans Newsidler 1508-1563）の曲が収められた。「ファンタジア」（Fantasia）は「リチェルカーレ」（Ricercar）とも呼ばれる、対位法を用いた即興性の高い器楽曲である。「お気に召すままに」（Nach willen dein）はホフハイマー（Paul Hofhaimaer 1459-1537）の声楽曲からのノイジードラーによるリュート・セッティングで、「ラテン舞曲ヴァシャ・メーザと後続舞曲フップフ・アウフ」（Ein welscher tantz Wascha mesa, & Der hupff auff）の「ヴェルシャー」（welscher）は「ラテン語地方（北イタリア、南フランス）の」という意味で、「ヴァシャ・メーザ」（Wascha mesa）は歩くような舞曲「パッサ・メッツォ」（Passamezzo）のドイツ語訛り、「フップフ・アウフ」は「ガリアルダ」（Gagliarda）のような3拍子の飛び上がる舞曲である。

16世紀も終わりに近くなると、それまでイタリアと南ドイツが中心であったリュートは次第にヨーロッパの北方に繁栄していく。その頃になるとリュートの低音弦が増え、ここに使われている8コース（15弦）リュートがイギリスではスタンダードになる。イギリスでもリュートは主要楽器の座を占め、終生独身であった女王エリザベスI世は常に4人のリュート奏者を抱えていた。彼等のみが男性として女王の寝室に入ることが許されたのである。シェイクスピアの「ウィンザーの陽気な女房たち」に出てくる「グリーンスリーヴズ」（Greensleeves）はもともと北部イングランド民謡であると言われているが、実らない遊女（グリーンスリーヴズ）との恋を歌った曲である。ここでは原曲に近い作者不詳のリュート・セッティングと1600年頃活躍したイギリスのリュート奏者フランシス・カティング（Francis Cutting ?-?）による変奏曲が組み合わされて使われている。

「ラクリメ（涙のパヴァーヌ）」（Lachrimae）と「メランコリー・ガリアード」（Melancholy Galliard）は、すでに上記のダウランドを代表する、この上なく寂しく美しい2曲である。ガリアードは本来比較的速い3拍子の「飛び上がる舞曲」であるが、この「メランコリー・ガリアード」は非常にゆったりとした例外的なガリアードである。

1600年前後イギリスと競争で東インド会社を設立したオランダは、総面積が九州にも至らない小国でありながら、17世紀にはヨーロッパの経済大国で、出島を通じて鎖国時代の日本ともヨーロッパ唯一の国として交流があった。その経済繁栄によりニコラス・ヴァレット（Nicolaes Vallet ±1585-±1650）のようなフランス生まれの（フランス式に発音するならニコラ・ヴァレである）リュート奏者がアムステルダムで活躍した。「菩提樹の下で」（Onder de Lindegroene）はオランダ語のタイトルの、まさにオランダの風景を思わせる牧歌的な曲である。「デカパン道化師」（Les Pantalons）のタイトルはフランス語であるが、時折ずっこけそうになる、あまり洗練されていない、ひょうきんなオランダ的ユーモアの曲である。この頃になるとリュートの低音弦はさらに増え、10コース（19弦）になる。

同じ頃（17世紀初頭）イタリアではさらに低音弦の多いアーチリュートが生まれる。これはその名称のように弓（アーチ）のように低音弦が長く伸ばされたリュートで、弦数の多いものは14コース（28本）にも上る。ここでは13コース（25弦）のものが使われた。これはイタリアにおけるバロック音楽の誕生と共に作られた劇音楽（オペラ）のために、音域の広いリュートが要求されたからである。この楽器では1610年から1630年頃活躍したピエトロ・パオロ・メリイ（Pietro Paolo Melii ?-?）の「カプリッチョ・偉大なマティアス」（Capriccio ditto il gran Matias）と「コレンテ・王妃」（Corrente detta la Regina）が収録された。「カプリッチョ」は「幻想曲」という意味は無く、「トッカータ」或いは「プレリュード」と同様、単に即興的な曲である。「コレンテ」は本来速い3拍子の「走る舞曲」であるが、「王妃」は走らずエレガントに歩くので、むしろ当時のフランスの舞曲「クーラント」（Courante）に近い。いずれも1616年にヴェネツィアで出版された曲集の第4巻目からである。

それから少し年代が下がった1630年頃、フランスではリュートの新しい調弦法が確立される。ニ短調の調弦を持った11コース（20弦）のリュートで、今日ではフランス式バロックリュートと呼ばれる。老ゴーティエ（Ennemond Gaultier 1575-1650）によって確立されたこの新しい調弦法によるリュート音楽は、その流派から多くの優れたリュート奏者を生んだ。これは「崩された様式」（Style brisé）と呼ばれ、ルイ・クープラン（Louis Couperin c1626-1661）やフローベルガー（Johann Jacob Froberger 1616-1667）などの鍵盤楽器（チェンバロ）奏者に大きな影響を与える。その老ゴーティエの作品から、彼の師メサンジョー（René Mezangeau ?-1638）に捧げる「トンボー」（Tombeau de Mezangeau）と「遺言」（Testament de Mezangeau）、それにカナリー諸島で生まれた山羊の飛び跳ねるのを模倣した舞曲「カナリー」の3曲が選ばれた。

上記のアーチリュートと同じ頃イタリアで生まれたテオルボは、いわば大型のアーチリュートで、主に劇音楽（オペラ）に使われた。別名をキタローネとも言い、バロック音楽の先駆者カッチーニ（Giulio Caccini 1545?-1618）はこの楽器で自ら伴奏（コンティヌオ）しながら歌った。テオルボは弦が長い為、普通のリュートのように第1弦を高く調弦できないので、第1、第2弦がオクターヴ低く調弦される。この面白い調弦効果を使って、イタリアでは17世紀初頭にソロの曲が作られたが、その最後を飾るのがフランスのロベール・ド・ヴィゼー（Robert de Visée c1650-c1725）である。彼はリュート、テオ

ルボ、ギター奏者としてだけでなく、歌手、ガンバ奏者、作曲家としても有名であり、ヴェルサイユ宮殿で国王ルイ14世のギター教師を務めた。当時のギターは5コース（10弦）で、或る意味でテオルボと似通った調弦法を用いた。同じ頃イタリアからフランスへ来て活躍した作曲家のリュリ（Jean-Baptiste Lully 1632-1687）のオーケストラ用の序曲をド・ヴィゼーがテオルボ用にセッティングした「リュリ氏の序曲・ヴェルサイユの洞窟」（Ouverture, La grotte de Versailles de Mr. Lully）と、ド・ヴィゼー自身の作曲家としての高い水準を覗わせる「パサカイェ（パッサカリア）」（Passaquaille）が14弦（ここでは単弦使用）のテオルボで演奏される。

18世紀に入ってJ.S.バッハ（Johann Sebastian Bach 1685-1750）の頃になると、リュートはより演奏の易しい鍵盤楽器（チェンバロ）に器楽の王座を奪われる。しかしドイツ語圏ではリュートはなお盛んで、ドレスデンの宮廷付リュート奏者として活躍したシルヴィウス・レオポルド・ヴァイス（Sylvius Leopold Weiss 1686-1750）は ヨーロッパ中の器楽奏者の中で最も高給取りであった。当時最大のリュート奏者であったヴァイスとJ.S.バッハの交友は、J.S.バッハの息子の一人であるヴィルヘルム・フリーデマン・バッハ（Wilhelm Friedemann Bach 1710-1784）が仲介者となり、J.S.バッハがヴァイスを訪ねていくことから始まる。ヴァイスの影響によりバッハもリュートの作品を残した。その中でも特にリュート的な小品「プレリュード・ハ短調」（Preludium BWV999）が選ばれた。バッハのリュート曲「シュースター氏のための組曲・ト短調」（Pièces pour la luth à Monsieur Schouster BWV995）は、このCDで使われているような14コース（26弦）のリュートのために書かれている。ヴァイスは初期には上記の11コース・リュートを使用し、1720年前後からは13コース（24弦）を使って合計400以上のリュート曲を残した。その中でもプレリュードとフーガの形式による「ファンタジー・ハ短調」（Fantasie c-moll）は11コース用の、ゆったりとした3拍子の舞曲「チャコーナ（シャコンヌ）・ト短調」（Ciacona g-moll）は13コース用の名曲である。

佐藤豊彦（Toyohiko Satoh）

Programme notes

One of the major works of John Dowland (1562 - 1626) is *Lachrimæ or Seaven Teares Figured in Seaven Passionate Pavans* (London, 1604). It is a collection of music for viola da gamba consort with lute. It contains seven versions of the *Lachrimae: the Lachrimae Antiquae, Lachrimae Antiquae Novae, Lachrimae Gementes, Lachrimae Tristes, Lachrimae Coactae, Lachrimae Amantis and Lachrimae Verae*. These seven *Lachrimae* are all based on Dowland's *Lachrimae (Pavan)*, a work for lute solos. The lute song *Flow my teares fall from your springs*, which is also composed on the same music, has a very sad and moving text. All this sadness seems to reflect the events in Dowland's own life, which was filled with disappointments and regrets. One of these was that he, the greatest English lutenist of his time, was never appointed as one of the lutenists of Queen Elizabeth I. Instead he spent most of his musical life on the continent, mainly in Denmark.

Robert Dowland, son of John Dowland and also a lutenist, published his *Varietie of Lute Lessons* in London in 1610. It is a collection of lute music by composers from various parts of Europe, in addition to music by both Dowland father and son.

On this CD, you can listen to 'seven tones' on seven different types of lutes. The music — made on as many as 130 gut strings in total — will give you a warm and comfortable feeling. You can listen to lute music from more than 250 years, ranging roughly from 1500 till 1750. This is indeed a 'Varietie of Lute Collections'.

After the introduction and development of the lute in medieval Europe it stabilized itself as a 6-course instrument with 11 strings around 1500. Music from this early period, by the Italian Francesco da Milano (1497 - 1543), called 'Il Divino', and by the German Hans Newsidler (1508 - 1563) is chosen for this CD. Francesco's Fantasia is an improvisational piece purely based on counterpoint. A piece in this style was also called a *Ricercar. Nach willen dein* is a an adaptation for the lute by Newsidler of a vocal piece by Paul Hofhaimer (1459 - 1537). The word 'welscher' in the title *Ein welscher tantz Wascha mesa, & Der hupff auff* means 'of the Latin speaking districts' (northern Italy and southern France). 'Wascha mesa' is German for 'Passamezzo' and 'hupff auff' is a jumping dance in triple time like a galliard.

By the end of the 16th century the centre of lute playing gradually moved from Italy and southern Germany to the north of Europe. The instrument changed, too, as the bass strings increased in number, and an 8-course lute with 15 strings became the new standard. This was also the case in England, where the lute had become one of the most important instruments by now. Queen Elizabeth I, for example, had no less than four lutenists at her court. As she remained unmarried all her life, these lute players were the only men allowed into her bedroom. *Greensleeves* is a tune from this period. Originally it came from northern England, but it became so popular that it is even mentioned in Shakespeare's *The Merry Wives of Windsor*. It is a song of a broken-hearted man who loved a lady called Greensleeves. Here an anonymous lute setting, close to the original, is combined with the variations by

Francis Cutting, an English lutenist around 1600. *Lachrimae and Melancholy Galliard* are two of Dowland's most popular pieces and they both have very sad and beautiful melodies. Originally a galliard was a rather fast jumping dance in triple time, but this *Melancholy Galliard* is an exception by being very slow.

The Netherlands, although small in size, -- smaller than Kyushu, the southern part of Japan--, it was an important economic power in the 17th century Europe. Competing with England for the trade in the Far East, it founded the East India Company. The Netherlands was, with its permanently occupied trading post in Dejima, the only European country which had commercial ties with Japan during this country's period of national isolation. Its prosperous capital Amsterdam attracted many lutenists such as French-born Nicolaes Vallet (ca. 1585 - ca. 1650). His *Onder de Lindegroene* has a Dutch title and is a pastoral piece which reminds us of Dutch scenery. *Les Pantalons* on the other hand has a French title, although it is a piece full of unrefined and straightforward Dutch humour. The lute around this time had again increased its number of bass strings; by now it usually had 10 courses with 19 strings in total.

Around the same time in Italy the archlute was developed. This was a lute with even more bass strings to meet the demand of an instrument with an increased range to perform in the new opera that hailed the birth of the baroque era. As its name suggests, an archlute has its extra bass strings on an extended neck that looks like a bow used for shooting arrows. On this CD you can hear a 13-course archlute with 25 strings in the *Capricio detto il gran Matias* and *Corrente detta la Regina* by Pietro Paolo Melii (active between 1610 and 1630). A capriccio is simply an improvisational piece like a toccata or a prelude. A corrente was originally a fast 'running dance' in triple time, but as Regina does not run but walk elegantly, in this case it is nearer to a French courante. Both pieces are from the fourth volume (Venice, 1616) of Melii's books of lute music.

Around 1630 in France, Ennemond Gaultier (1575 - 1650) invented a new tuning for the lute, in d-minor. The lute in this tuning is what we now call a French baroque lute and it had 11 courses with 20 strings. The Gaultier School turned out many eminent lutenists who wrote much lute music of supreme quality. Its style was called 'Style brisé' and had a great influence on cembalists such as Louis Couperin (ca. 1626 - 1661) and Johann Jacob Froberger (1616 - 1667). Three of Gaultier's pieces are chosen here: *Tombeau de Mezangeau* and *Testament de Mezangeau*, which were both dedicated to Gaultier's teacher René Mezangeau (? - 1638), and *Canarie*, a dance imitating a jumping goat, which originated in the Canary Islands.

A theorbo or chitarrone is a larger archlute and was mainly used in theatre music like opera. It was invented in Italy almost at the same time as the archlute. Giulio Caccini (1545? - 1618), one of the pioneers of baroque music, sang to his own continuo accompaniment on such an instrument. Due to the long string length of the theorbo its first and the second strings are tuned an octave lower than on a normal lute. Taking full advantage of this interesting effect, many solo pieces were composed for

theorbo in the beginning of the 17th century in Italy. One of the last composers of theorbo music was Robert de Visée (ca. 1650 - ca. 1725). He was well known not only as a theorbo player, lutenist and guitarist but also as a singer, gambist and composer. His work included teaching guitar to King Louis XIV at Versailles. The guitar at this time had 5 courses with 10 strings and had a tuning that was in some ways similar to that of a theorbo. On this CD you can listen to two pieces played on a theorbo with 14 single strings. The first is *Ouverture 'La Grotte de Versailles' de Mr. Lully*, which is a theorbo setting by Robert de Visée of an orchestral overture by Jean-Baptiste Lully (1632 - 1687), an Italian composer also working for Louis XIV at Versailles. The other piece is a *Passaquaille* which shows De Visée's excellence as a composer.

In the 18th century, around the time of J. S. Bach (1685 - 1750), the pre-eminent position of the lute was gradually taken by keyboard instruments like the harpsichord, as they were much easier to play. But in the German speaking world lutes were still popular. That is why Sylvius Leopold Weiss (1686 - 1750), lutenist at the royal court in Dresden, received the highest salary of all European instrumentalists at that time. Weiss, the greatest lutenist of his time, and J. S. Bach became acquainted with each other through Johann Sebastian's son Friedemann Bach (1710 - 1784). Inspired by Weiss, J. S. Bach also composed music for the lute. His *Pièces pour la luth à Monsieur Schouster* (BWV 995) was intended for a 14-course lute with 26 strings. Such an instrument is used on this CD for another most suitable lute piece by J. S. Bach, the *Preludium* (BWV 999). Weiss used an 11-course lute in his early years and changed to a 13-course instrument around 1720. He composed more than 400 lute pieces in total. His Fantasie c-moll is a slow dance in triple time composed in the style of a prelude with fugue, and the Ciacona g-moll is a masterpiece for 13-course lute.

Toyohiko Satoh

Translation: Junko Nagiyama

櫻田　亨（さくらだ　とおる）

日本ギター専門学校でギターを学んだ後、オランダのデン・ハーグ王立音楽院でリュートを佐藤豊彦に師事した。リュート、テオルボ、ビウエラ、バロックギター、19世紀ギターといった撥弦楽器を幅広く演奏し、時代やその音楽にふさわしい楽器を的確に使い分けている。また、すべての楽器にガット弦を用いて歴史的な表現力を引き出す演奏スタイルは、日本ではまだ数少なく、非常に興味深いものである。ソリストとしてのみならず、通奏低音奏者として、共演者の意図を十分に汲み取って盛り立てる柔軟な音楽性は、多くの演奏家から信頼を集めている。「ルストホッファース」「ムジカ　エランテ」メンバー。リュート&アーリーギターソサエティ・ジャパン事務局長。

Toru Sakurada

First studied the guitar in Japan, and studied the lute with Toyohiko Satoh at The Royal Conservatoire in Holland, The Hague. Skillful at various kinds of plucked string instruments such as the lute, theorbo, vihuela, baroque guitar and romantic guitar, he always chooses the most appropriate instrument for each piece. Also, he uses gut strings rather than nylon ones for drawing the original expressive tones of historical instruments. His ambitious way makes him one of the most remarkable lutenists in Japan. As well as a soloist, he is also considered a very reliable continuo player because of his flexible musicianship, which fully supports ensemble performance. A member of 'Lusthoffers' and 'Musica Errante', a general director of 'Lute & Early Guitar Society Japan'.

Toru Sakurada　Toyohiko Satoh

RECORDING DATE and LOCATION
7–9. March 2006
Chichibu Myuzu Park Hall, Saitama, Japan 秩父ミューズパーク音楽堂

RECORDING DATA
Microphones : MBHO MBP604/KA100LK with Schneider disc
Method : Optimal stereo signal (OSS = Baffled stereo)
Pre amplifier : GRACE DESIGN model 201
Line amplifier : GRACE DESIGN Lunatec V3
Recorder : TASCAM DV-RA1000 (DSD recording)
Master clock : ROSENDAHL nanosyncs
Monitor speaker : Waon Recording Monitor
Monitor amplifier : Bryston BP20/Flying mole DAD-100pro

EDIT DATA
DSD to PCM converter : dcs974
Digital audio workstation : Waon DAW mk III
Master clock : ROSENDAHL nanoclocks
Monitor speaker : PMC TB1SM tuned by Waon Records
Monitor amplifier : Bryston BP20/4B

Executive producer : Kazuhiro Kobushi 小伏和宏
Recording co-producer : Toyohiko Satoh 佐藤豊彦
Recording engineer & editor : Kazuhiro Kobushi 小伏和宏
Cover design & art work : Masako Saimura 才村昌子
Photograph : Kazuhiro Kobushi 小伏和宏

Waon RECORDS
ワオンレコード
http://waonrecords.jp/